

現代経営・会計情報とコンピュータ利用

The business - accounting information in today and the use of computer

総括研究員：遠藤一久

分担研究員：石原 肇 中西 基

本共同研究の計画

（その必要性）

- (1) 実用性が高く、かつ社会的ニーズの大きい総合的課題である。わが国において社会的に極めて関心が高く、実業界にも益するところは大きい。
- (2) 学界において注目されている重点的综合研究課題である。社会科学の各学界で関心のある課題である。
- (3) 新規性または発展性がある総合研究課題である。現在、極めて新規で、今後の展開が注目されている。
- (4) 将来性のある萌芽的综合研究課題である。このテーマは現在、学問的によやく緒についたばかりで、今後の展開が期待される。
- (5) 学際的領域にある総合研究課題である。広く社会科学各領域の学際的共同研究を期待することができる。
- (6) その研究課題に興味を持つ研究者が本学に多くいて、豊富な研究成果が期待される総合研究課題である。

（その目的）

- (1) 本総合研究課題の目的と意義－ダウンサイジングの流れの中でコンピュータの性能は飛躍的に進歩し、コストも大幅に下がってきている。しかし、経営者の期待と裏腹に一向に必要な情報が自由に出てこないのが現状である。その原因の一つに過去のデータの履歴が残されていないことが指摘される。
さらに重要なことは、現代における経営・会計情報の性質のゆがみの問題である。最近の経済事件に端的に表されているように、経営・会計情報に信頼がおけないという社会的不信感がきわめて強く示されている。
本研究は、一方で現代における経営・会計情報の性質（その制度的成り立ち）を究明すると同時に、その情報をコンピュータによってどのように利用しうるのか、その可能性と現実性を解明しようとするものである。
- (2) 本総合研究課題の将来への展望－上述の意義を有する本総合研究課題は、早急な研究の必要に迫られているテーマである。しかも、この課題は、総合研究によって実り多い成果を期待しうるものである。将来にわたって及ぼす影響は、ますます大きいものとなるのは確実であり、本研究の意義も高まるものと思われる。

共同研究の進捗状況の総括（中間報告）

（1997年度）

本総合研究課題の目的についての意思統一（討論）を行い、研究会を開催し、本年度の研究目標を、設定した。第一に経営・会計情報の現状をまず分析した。第二にコンピュータ利用の可能性、特に最近注目されている「データマイニング」なる研究領域について検討した。

その研究成果は、各人によって順次、発表されている。

（1998年度）

本年度は、各人のそれぞれの専門分野に従って研究を進めた。遠藤は、特に「現代ドイツの銀行会計」のテーマのもとに、この分野における会計情報の機能を分析した。その成果は、1998年6月に著書「現代ドイツの銀行会計」（森山書店刊）として公刊された。さらに石原は、現代ドイツにおける会計制度の情報機能を分析した。その成果は、「ドイツの資本調達容易化法」（「会計」1998年8月号）として公表されている。中西は、主として現代ドイツの税法に関する情報機能を分析し、その研究成果を目下、まとめている。